

英 語 科

場面や状況に応じた言語表現を選択・抽出して 適切に活用できる生徒の育成

—領域統合型の言語活動を中心とした単元・授業構成の改善—

奥田 陽一・竹島 潤・梶山 和俊・ポンド 良子・Jason Baidenmann・*三原 伸之

1 主題設定の理由

(1) 共通研究主題との関連

前回研究に続き、本校研究主題「深い学びを引き出し、これからの時代に求められる資質・能力を育むカリキュラム・デザイン 第2次」を受け、英語科では前回研究で設定した資質・能力を、新学習指導要領総則に示された以下の3つの側面に基づいて見直しを行った。

- 各教科における指導を通して育成を目指す資質・能力
- 学習の基盤となる資質・能力
- 現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力

表1に入る右側2つの資質・能力は教科横断的な視点に立ったものである。この3つの側面から見直した場合、全体研究と英語科の研究主題との関連をより明白にすることができた。

表1 新学習指導要領に基づいた英語科としての重点研究箇所

	各教科における指導を通して育成を目指す資質・能力	学習の基盤となる 資質・能力 (言語能力・情報活用能力(情報モラルを含む)・問題発見・解決能力等)	現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力
知識・理解			
思考力・判断力・表現力	今回英語科として	の重点研究箇所	
学びに向かう力・人間性等			

まずは今回の英語科としての重点研究箇所として設定した資質・能力(表1中央)は、本校研究主題として設定された資質・能力(表1右枠)と重なる。前回研究は教科特有の資質・能力の枠をイメージしていたが、新たな右2つの縦列を意識することで、教科横断的な視点と英語科でしか担うことができない資質能力の両方を包括することができる。具体的な生徒の姿として、「英語を聞いたり読んだりして得られた情報や表現を、場面や状況に応じて選択したり抽出したりするなどして適切に活用し、話したり書いたりして事実や自分の考え、気持ちなどを表現することができる」と設定した。

(2) 教育の今日的課題から

英語教育改善のための英語力調査(文部科学省, 2016)では、英語教育の今日的課題として、聞くことについては、「語句単位など断片的な理解はできているが、文全体及び文脈で意味を把握すること」や書くことについては、「文脈に沿った内容を適切に表現すること」を挙げている。また同調査においては、この課

題に対する指導改善のポイントとして、「多様な表現をインプット・アウトプットする活動の工夫」や、また、「求められている内容を適切に表現し、読み手に伝わる英文を書く指導の工夫」を提案している。

中央教育審議会「答申」(2018)では、「習得した知識や経験を生かし、コミュニケーションを行う目的・場面・状況に応じて適切に表現することなどに課題がある」ことが述べられており、その課題に対する指導改善のポイントとして、授業内で「生徒が目的を達成するために、必要な語彙や文法事項などの言語材料を取捨選択して活用する」ことを提案している。これこそが、「これまでの英語の知識の中から選び出す判断をし、最適な言葉で表現できること」を達成するための指導の指針である。この指導によって導かれる生徒像が、今回の英語科としての「場面や状況に応じた言語表現を選択・抽出できる生徒の育成」につながると思われる。

(3) これまでの研究との関連・生徒の現状と課題から

前回研究や前々回研究に遡ると、ジグソー活動や推論発問などの活動の中で、新学習指導要領で謳われているアクティブ・ラーニングの要素が大切にされてきた。

しかし振り返ると、生徒からは「思っていることがあっても英語で表現できない」という感想を、授業者からは「得意な子だけが活躍する授業になっていないか」という反省を、また参観者からは「附属の生徒がどうやって英語力を身に付けているのか知りたい」といった感想が出てきた。さらに研究授業、研究協議の度に、「生徒の言語としての学びは成立していたかどうか」について、指導助言者を含め、私たち英語教員で問うことが多くなってきた。主体的・対話的で深い学びをねらった授業であったとしても、「これまでの英語の知識の中から自分の考えや意見、言いたいことを表すために、最適な言葉で表現できていないことも多い」ということである。他教科では保証されない、母語における基礎的な言語能力とは別に必要な言語能力であるにも関わらず、英語という言語としての学びが軽視されてはならないと考え、この主題設定とした。

2 研究仮説

上記のような現状や課題を踏まえ、「目的・場面・状況に応じて適切に表現すること」さらに「これまでの英語の知識の中から選び出す判断をし、最適な言葉で表現できること」を達成するための方法を示したい。表1において、設定した資質・能力はまさに生徒の日常で必要な言語処理そのものであるため、現実の使用言語で要求される言語処理に、可能な限り近づけることを考えた。その条件を満たす言語活動として、第1次研究に引き続き、「読むこと」「聞くこと」「書くこと」「話すこと(やり取り・発表)」などの複数の技能を統合して行う領域統合型の言語活動を中心に据えた。「聞くこと」「読むこと」の活動でインプットし、そして目的・場面・状況に応じて、「話すこと」「書くこと」の活動で伝えるための言語表現を取捨・選択する機会を多く作ることで達成をねらう。図1において「見方・考え方②」が働く場面を有する領域活動型であることが条件となる。そして前回・今回研究の主要テーマとなるP D C Aサイクルの要素を加え、単元・授業構成を行っていきたい。

以上を踏まえ、「領域統合型の言語活動による単元・授業構成で、『目的・場面・状況に応じた言語表現を選択・抽出して適切に活用できる』生徒を育成することができる」という仮説を立てた。

3 研究計画

仮説に対する検証は、以下の方法で行ってきたが、教科特性や、目指したい資質・能力を踏まえ、数値での検証よりも、生徒の言語表現の変容での検証とする。

(1) 対象生徒

平成30年度 第3学年生徒(5学級)
令和元年度 第3学年生徒(5学級)

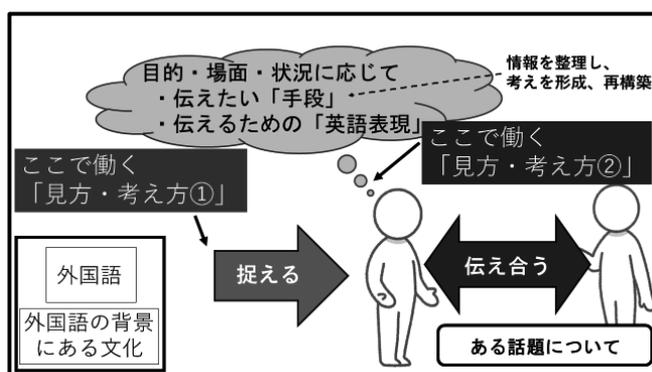


図1 「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を表す図

(2) 検証方法

昨年度は12月(事前)と2月(事後)(検証期間内授業数36回),今年度は7月(事前)と11月(事後)に(検証期間内授業数45回),以下の調査問題(表2)を行った。調査問題は、「場面や状況に応じて適切な言語表現を選択・抽出できる力」を測るための独自問題である。一昨年度本校において実施したものと同一作文問題であり,上記図1の見方・考え方を働かせながら言葉を選び取って表現する力を確かめた。その際,「場面や状況に応じて適切な言語表現を選択・抽出できる力」を構成する力をCanale & Swain(1980)のコミュニケーション能力説を参考に,次の4つの要素に沿って生徒の表現を見取ることにした。文法的能力では,「文法の正確さに気をつけ,誤解を生まずより伝わりやすい表現を取捨選択する力」談話的能力では「文と文の関係を考えて伝わりやすい接続詞,接続副詞や前置詞句などを選んで表現する力」社会言語学的能力では,「言語以外の周情的状況を考えながら,より適切に言語を理解したり表現を選んだりする力」方略的能力では,「言いたいこと・ものを言い表せない時は,別の表現で同じ意味を表す表現を探す力」をものさしとして指導前と指導後の表現の変化を検証結果として記述した。

表2 研究仮説検証のための調査問題

<p>・場面</p> <p><u>あなたは,ある日の金曜日,廊下でALTの先生から以下のQUESTIONをされました。</u></p> <p>・QUESTIONについて,あなたの考えとその理由を2つ英文で書きなさい。</p> <p>・語数の目安は25語以上です。</p> <p>・解答は,解答欄に書きなさい。なお,解答欄の外に書かれたものは対象外となり,採点されません。</p> <p>・解答時間は7分とし,終了の合図があったら,速やかに筆記用具を置いてください。次の合図で,語数をカウントし,枠外にある()語に,使用した語数を書き入れてください。</p> <p>※「,」「.」「?」「!」「”」「'」などの記号は語数に入れません。また,「don't」などの短縮形は1語とします。</p> <p>QUESTION</p> <p>What do you like to do on weekends?</p>

仮説・検証に関連して,本校英語科で育成したい具体的な資質・能力について(表3)に示す。

表3 英語科で設定した資質・能力表

	各教科における指導を通して育成を目指す資質・能力	言語能力・情報活用能力(情報モラルを含む) ・問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力	現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力
知識・技能	外国語の音声や語彙,表現,文法,言語の働きなどを理解するとともに,これらの知識を,聞くこと,読むこと,話すこと,書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能		
思考力・判断力・表現力	聞いたり読んだりして得られた情報や表現を,場面や状況に応じて選択したり抽出したりするなどして適切に活用し,話したり書いたりして事実や自分の考え,気持ちなどを表現する力		批判的に考える力 未来像を予測して計画を立てる力 多面的,総合的に考える力 コミュニケーションを行う力
学びに向かう力・人間性等	外国語の背景にある文化に対する理解を深め,聞き手,読み手,話し手,書き手に配慮しながら,主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度		他者と協力する態度 つながりを尊重する態度 進んで参加する態度

4 実践の概要

(1) 領域統合型の活動の具体

第一次研究において、次のような領域統合型の活動例(表4)を示した。この活動例を改善・深化させ、学年や生徒の実態に応じて活動を配列している。その中でも各学年で主となる領域統合型の活動例(表5)を示す。

表4 第一次研究における領域統合型の活動例

1	聞いたことに基づいて話す。
①	文字を介さず、CDや教師が発する音声を聞く。
②	①で聞いたことを正しく再生する。
③	①で聞いた内容を変えず、別の言葉で言い換えて話す。
④	③に加え、その内容に対する自分の意見を添えて話す。
2	話したことに基づいて書く。
①	1の内容についての評価発問に対する自分の考えを書く。
②	他人の考えを参考にして、自分が書いたものを書き直す。
③	参考にできる点や改善点を、ペアやグループで指摘し合って書き直す。
④	自分が書いたものを見直し、新たに分かった情報を付け加えて書く。
3	書いたことに基づいて話す。
①	目的、場面、状況に応じた話し方を考える。
②	自分が書いたことに基づいて、ペアやグループに向けて話す。
③	自分が書いたことに基づいて、クラスに向けて話す。
④	ディスカッションやディベートのような活動を通して、互いの意見を交換する。
4	読んだことに基づいて書く。
①	与えられた時間内に、指示された部分を黙読する。
②	テキストを見ずに、①で読み取った内容について英語でメモを取る。
③	②のメモを基に、内容を再構築して書く。
④	③に加え、その内容に対する自分の意見を添えて書く。

表5 今回研究における各学年で主となる領域統合型の活動例

学年	活動の概要	具体的活動名
1年	インプット後、短期記憶で保持させてアウトプットできるようにする領域統合型の活動	読んで話す(音読すること) read and look-up・3秒reproduction 読んで書くこと delayed copying 聞いて話す(言う)こと repetition・3秒reproduction
2年	1年生の活動を軸にしながら、「書く」ことの量を増やし、言葉の取舍・選択の必要性を少しずつ上げていく活動	聞いて書くこと dictation 聞いて話す(伝える)こと reporting(友達の考えや思いを他の人に伝える) 読んで話す(伝える)こと retelling, summarizing(教科書の題材が中心)
3年	1・2年生の活動を軸にしながら、言葉の取舍・選択の必要性をさらに高めていく活動	聞いて書くこと dictogloss 読んで話すこと retelling, summarizing(社会的な話題が中心)

(2) 単元・授業構成の具体

① 帯学習における領域統合的な活動の調整により、足りない力を強化する。

主活動での成果物の評価や活動の見取りの評価を通して、不足していると判断した資質・能力を改善し、高めるための手だてとなる領域統合型の活動を次の授業の帯学習の中に組み込んでいる。(図2) さらに単元内の言語活動の取り入れ方のイメージ(図3)では同じような内容を繰り返しながら、最初から教師が表現をすべて与えていくのではなく生徒自身で、主体的に表現を蓄えていく流れを作る。その具体例(表6)を示す。

帯学習の内容	目安の時間
英語の歌	約3分
スモールトーク系	約5分
基礎インプット系	約7分
課題を克服するための領域統合型の活動	約5分

継続してさせたい領域統合型の活動を追加

主活動の成果物から課題を発見

図2 帯学習における領域統合的な活動の調整

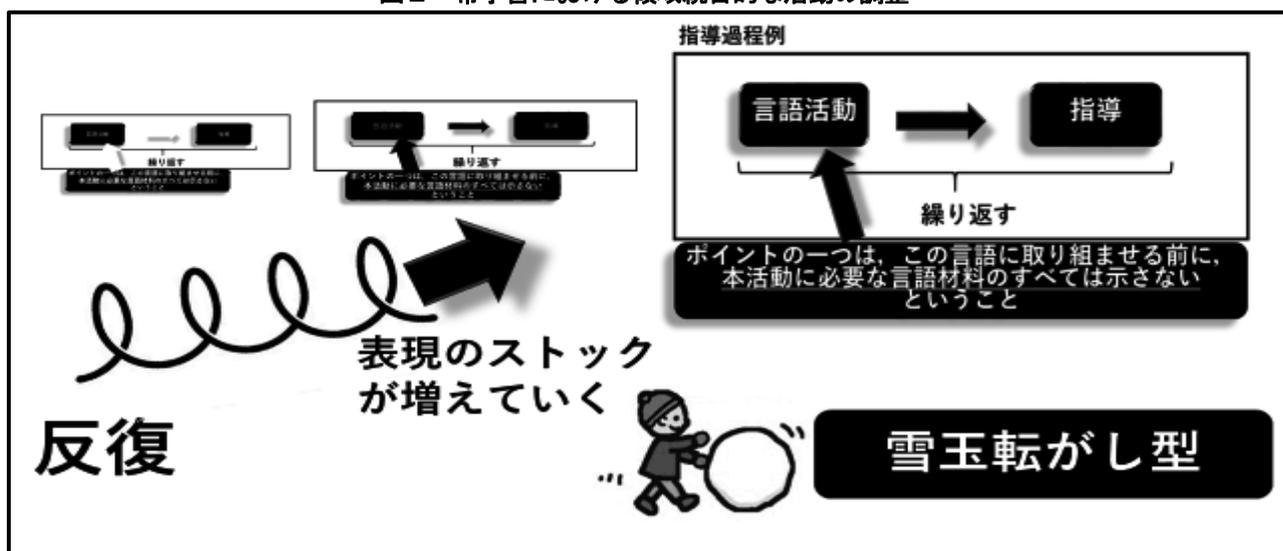


図3 単元内の活動構成のイメージ

表6 雪玉転がし型における単元内の活動の具体例

教科書のUnit	単元の最初の活動	単元の中間の活動	単元の終末の活動
Unit4	「避難訓練を説明しよう」	「附属中の避難訓練を紹介しよう」	「自宅の近くに外国人が引っ越してきました。日本の災害対策について何をすればよいかという質問に答えよう」
Unit5	「あなたの身近なロボットを紹介しよう」	「次世代にあなたがほしいロボットを教えてください」	「人間とロボットの共生について班内で議論しよう」
Unit6	「自分の好きな人を紹介しよう」	「Unit6を読んで、あなたが人生で大切にしたいものは何か、教えてください」	「高校入試の面接試験を英語でしよう」

② 英語における「見方・考え方」を重視した手だて

領域統合型の活動を中心とした、単元・授業構成を行う中で、「場面や状況に応じた言語表現を選択・抽出して適切に活用する」ために行っている具体的な手だてを示す。主活動での成果物の評価や活動の見取りを行った後に、次の手順で改善へとつなげる。まずは目的・場面・状況の捉え方の共有を行い、生徒の英語表現の実態の共有し、「言いたいけど・言えないこと」を取り上げて、次の表現課題へ活かす手だてを行う。

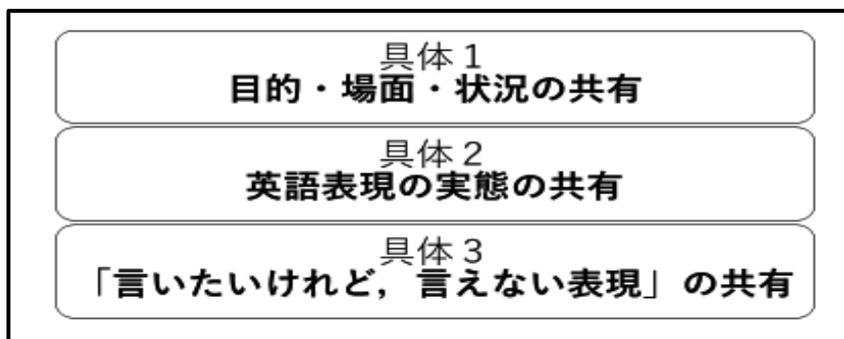


図4 場面や状況に応じた言語表現を選択・抽出して適切に活用する手だて

以下、昨年11月に本校で行った実践研究発表会での実践授業の具体を示す。

- 実践時期 令和元年11月
- 対象学年 令和元年度 第3学年生徒 177名 (5学級)
- 題材 Unit 6 Striving for a Better World

(New Horizon English Course 3 東京書籍)

本 時 案 (計画 第3次の第5時)		
目 標	○ いままでの学習内容を踏まえて、自分の「生き方」について考え、英語で表現することができる。(ワークシート記述)	
学 習 活 動	指 導・支 援 と 留 意 点	評 価 等
1 英語で挨拶をする。	1 英語で挨拶をし、授業の雰囲気を作る。授業の冒頭に、既知の文法および語句を使用する活動を行い、英語を話す雰囲気を作る。	
2 英語の歌やチャンツを通して、英文の口答練習をする。	2 英語のリズムを意識して英文を発声できるよう、歌やリズムチャンツに合わせて英文を読む練習の場を設ける。	
3 教科書の内容の確認を行う。	3 教科書本文のインプットを促すとともに、前時までの内容を確認する。関係する資料やキーワードとともに、全体でも学んだ内容の確認を行う。また、言い換えた表現から本文再生を行う活動も取り入れ、多様な表現のインプットの場とする。	
4 前時での英作文で、生徒が言えなかった表現への手立てを行う。	4 言えなかった表現をそのまま教師が提示するのではなく、何文か提示することで、生徒が取捨選択できるようにする。	
5 本時の目標を知る。	5 見通しを持って学習できるように、本時の目標を伝える。	

<p>6 アウンサンスーチーの現状について知り、班員と意見を交換しながら、自分の考えをもつ。</p> <p>(1) アウンサンスーチーの現状についての文章を読む。</p> <p>(2) 内容をペアで確認するとともに意見を交換する。</p> <p>(3) 事実発問を行い、全体で内容を確認する。</p>	<p>6 読んだり聞いたりして得た情報をもとに、自分の考えを深める場とする。</p> <p>(1) 生徒がアウンサンスーチーの現状を知るために必要な最低限の情報のみを与える。</p> <p>(2) 内容理解を促進するためにペアで確認をさせる。</p> <p>(3) ポイントとなる点について事実発問を行い生徒のより一層の理解を促す。</p>	
<p>What does Aung San Suu Kyi think about now ?</p>		
<p>7 前時と本時の内容をふまえ、与えられたトピックに対する自分の意見を英語で書く。</p> <p>(1) 本時の到達目標を、ルーブリックを用いて示す。</p> <p>(2) 自分の考えを書く。</p> <p>(3) 上手く表現できている生徒の文を参考にする。</p> <p>(4) クラス全体で意見を共有する。</p> <p>8 自己評価表を使って、本時の活動の振り返りをする。</p>	<p>7 アウンサンスーチーの政治家としての側面・個人としての側面・ノーベル平和賞受賞者としての側面について書いた自分の意見を振り返り、現状の彼女の状況のみで判断した意見にならないようにする。</p> <p>(1) 評価基準を知り、求められている英文の基準となるように、表現を取捨選択できるようにする。</p> <p>(2)ブレインストーミングの時間を設け、それをペアでシェアする時間を設けることで、考えを整理できるようにする。教科書だけではなく、前回の授業で紹介した生徒の良い表現集を参考にするように促す。</p> <p>(3) 教材提示装置を使って、いくつかの作品をスクリーンに写し、良い表現を共有する場とする。</p> <p>(4) 数名の生徒の意見をクラス全体で共有することで、多様な意見に触れる場とする。</p> <p>8 本時の活動について、自己評価できるようにする。</p>	<p>思考・判断・表現</p> <p>表現の方法を取捨選択しながら自分の考えを英語で書くことができる。(ワークシート記述)</p>

英語科研究主題にある「場面や状況に応じた言語表現を選択・抽出できる生徒の育成」を目指して、生徒が自分の意見を持ちやすいように教科書の単元構成を考えたり、教科書の内容を発展させた題材を取り扱ったりしている。また、生徒たちには、今を生きる国際人として世界で起こっていることや世界が直面している問題について自分の意見を持つようにも指導をしている。本単元では、アウンサンスーチーの生涯を個人的側面と政治的側面から描き、彼女が成し遂げたことが紹介されている。今回は上記の点を踏まえて、教科書本文を導入する前に、彼女を題材にしている映画の該当場面を見るようにした。本文を導入する

際の理解の促進に役立つだけでなく、時代背景や彼女の心情の変化、切っても切れない家族との絆の深さなどについて知ることができた。彼女に関する知識が増すことで、生徒たちの思考は深化し、その思いを表現するための言語表現の選択や抽出への意欲が増したと考える。また、政治的側面、個人的側面それぞれに対して、自分の意見を書き、教師が添削したものを見たり、紹介された良い例を見たりすることで、このような場面や状況下で、自信を持って使える表現の増加につながったと考える。

また、前述したように、社会的に批判が集まっているアウンサンスーチーの現状についても知ることで、これまでの授業で構築した価値観を揺さぶり、批判的思考力を使う場面とした。今までの自分の意見を踏まえながらも、単一ではない意見が予想されるテーマについて表現することは、より主題に迫る活動になったのではないかとと思われる。他国で起こっている同じような事例について記述したり、自分のこれからの生活に落とし込んで考えたりしている生徒の作品を読むことで、自分の意見を表現できていることが感じられた。

5 成果と課題

「3 (2) 検証方法」で述べたように、教科特性や目指す資質・能力をふまえ、数値的な検証よりも生徒の言語表現の変容に重きをおく。顕著な生徒の記述の変容を見取る。コミュニケーション能力説を参考に、4つの要素、文法的能力・談話的能力・社会言語学的能力・方略的能力に沿って、指導前と指導後の表現の変化を検証結果として記述する。以下は生徒作品の内、多く見られる変容を含むものを一例として記述する。

文法能力について

指導前	指導後
I am *relax. I am happy. You will be fine.	I relax after a game. I am relaxed. I am relaxing. Reading books makes me strong. You can make your life better.

品詞による使い分けは、中学生の最も苦手な文法の一つであるが、2年生の教科書を使い「まんじゅうこわい」のユニットを再度リテリングさせ、キーワードとして「scary, scared, scare」を意識させると、指導後のように relax の基本的な品詞とその使い方を捉え、適切な使い方に変化した。また1文型や2文型が好まれる状況もあるが、中学一年生のレベルの文型だけで書いている生徒もいた。そのような場合、学年の巻末にある読み物教材を使って、その学年の一番難しいかつすべての文法事項を包括する文章をあえて「読み比べ」ならぬ「領域統合型の言語活動比べ」をした。具体的にはディクトグロスで復習機会をもつと、より学年の難易度の差を感じ、自分の書く文章の客観的な難易度が俯瞰できるため、文型や、後置修飾などを使った文に変化が起きた。

談話的能力について

指導前	指導後
I walk every day. I like to eat sushi. Let's go to my favorite sushi shop.	I like to sleep. I have two reasons. First ~. Second ~.

談話的能力を具体化する中でも、「独立した文の関係性を考えて」文章にしたり、「文の適切な配置を考えて」文章にしたりする能力は必然である。中学生のレベルで難しすぎる指導は意味をなさない。そのような時、各学年の教科書のユニット間に出てくるプレゼンテーションのページやディスカッションの準備のページを使って、領域統合型の活動を行うと、基本的な文章構成の型が根付いてきた。さらにその引き出しに、学校では教えないレベルのディスコースマーカーが生徒の自主性で追加されていった。

質問 2

日本語で書いても英語で書いても、同じように自分の表現したいことが十分に表現できた。

以下、生徒の変容を考慮しつつ、指導及び授業内容の実践を振り返り、成果と課題を考察する。

(成果)

- ・領域統合型の基本的な活動パターンを一次研究で整えたことにより、授業構成のバリエーションを以前よりも増やすことができた。成果物から一長一短を見取り、次の授業構成につながりやすくなり、上記のような表現の質的变化を過半数の生徒から見取ることができた。
- ・領域統合型の学習活動の中で、「表現しにくいことを言い換えて表現する」能力が高まった。初めにインプットした情報から、メモを取り、伝え、まとめ、言い換え・書き換える中で、いろいろなサンプルと遭遇し、足りない力を補う活動を通して、失敗しても使い続ける十分な経験が成果として表れてきた。
- ・検証問題後のアンケートにおいて、「英語であっても日本語と同じように自分の言いたいことを表現できた」という問いに「当てはまる」・「どちらかという当てはまる」という回答の割合が増えた。個人の意識ではあるが、2年連続で向上した学習者の肯定的な意見から、手だてが有効であったと考える。

(課題)

- ・領域統合型の中でもどのような活動が「自分の言いたいことを英語で表現する」ために効果的であったかを生徒のアンケートにより検証した。生徒にとっては領域統合型の活動が直接有効であったという回答はほとんど得られなかった。語学学習者として厳しいトレーニングよりも、楽しさや、珍しさを感じる活動を挙げていたので、領域統合型の活動の意義をさらに浸透させるべきだと考える。
- ・中学生のレベルで求められる英語表現のレベルについて改めて考えてみる。外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠では、A2レベル「ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、地元の地理、仕事など直接関係がある領域に関しては、文やよく使われる表現が理解できる。簡単で日常的な範囲なら、身近で日常の事柄について、単純で直接的な情報交換に応じることができる。」が中学生のレベルとなっている。多くの学校でのパフォーマンス課題や、生徒が満足感を感じるレベルは、さらに高いレベルが求められるのではないか。どのレベルの英語表現ができれば、生徒としても自信を持てるレベルにあるのかというものを具体化して示していくことの必要性を感じた。まずは過去の卒業生の作文やスピーチをサンプルとして残していき、生徒達が表現レベルをメタ認知できるような環境を目指したい。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省 (2016) 『英語教育改善のための英語力調査』
- 2) 文部科学省 (2017) 『中学校学習指導要領』
- 3) 文部科学省 (2017) 『中学校学習指導要領解説 外国語編』
- 4) 文部科学省 (2017) 『中学校学習指導要領解説 総則編』
- 5) 中央教育審議会(2017) 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)』
- 6) 奈須正裕(2017) 『資質・能力と学びのメカニズム』 東洋館出版社
- 7) 西岡加名恵(2008) 『教科と総合学習のカリキュラム設計 パフォーマンス評価をどう活かすか』 図書文化
- 8) 岡山大学教育学部附属中学校(2016) 『研究紀要 第52号』
- 9) 岡山大学教育学部附属中学校(2018) 『研究紀要 第53号』
- 10) 新井浅浩(2018) 『学びに向かう力の概念的検討』—ガイ・クラックストンの4Rs理論を手がかりに—
- 11) Canale & Swain(1980) 『Theoretical Bases of Communicative Approaches of Second Language Teaching and Testing』